

STAND UP!

anju

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

——絶望の中に沈んでいた彼が青さとひたむきさに触れて、青春を取り戻す物語。——

不慮の事故によって日常をなくした彼が、もう一度人生をやり直します。

彼らのひたむきさ、素直さとともに彼が成長していく。

※◆のオリ主小説です。どこまで青春を描けるかは、如何に筆者が納豆菌を入れないかにかかっているので、保険としていろいろタグが付いています。

まあ、がんばろうかなぐらいの気合いなので温かく見守っていただけると幸いです。

目次

この世界との別れ。	1
俺は新しい人生を手にしたらしい	5

この世界との別れ。

名前：神崎 かんざき 日向夏 ひゅうが

誕生日：11月20日

身長：192cm ↓ 186cm

体重：87kg ↓ 77kg

血液型：A型

星座：蠍座

利き手：右投げ両打ち

ポジション：捕手 キャッチャー

プロローグ

7月、未だ梅雨が明けず晴れたら気温が上がるこの季節
うだるような暑さのなか、人々はただ日常を過ごす。

俺もそのうちのひとりだった。

いつものように大学に行き、くだらない話を友人とする。
いつもの日常。変わらない毎日。それでも楽しい日々。

でもどうしてだろうな。今俺の目の前には空だけが映っている。

どうして、俺の体は動かない？

どうして、声がでないんだ？

どうして、どうして…

次に目覚めたときには、白い天井と、俺の顔を覗き込む両親、弟がいた。

その時から俺の生活は一変した。

立つこともできない俺の足。

何もできない自分の無力さ、人の力を借りないと生きることが出来ない俺。

俺に生きる意味があるのだろうか？

両親は泣いて喜んでくれたけど、それでも俺は楽観的に考えることが出来ないでいた。

なあ、俺は生きているのか？

生かされているのか？

俺はずっと絶望の淵に立たされている気分だった。

ただ、ただ普通にいたかったただけなんだ。

おれは、普通に働いて、普通に結婚して、普通に子供を育て、普通にじじいになる。

望んでいたことはそれくらいだろ？

その普通さえもこの手からすり抜けていったんだ。

かみさま…

どうして？

なぜ？

どうしようもなく世界ってやつは俺にやさしくない。

風が吹いている。

今日もあの日と同じ、よく晴れた日だ。

どこまでも続く白い雲

あの雲に乗れば俺も遠くへ行けるのだろうか？

今日はどうしてか届きそうな気がするんだ。

少し手を伸ばせば。

…ああ、今日も空は青いな…。

最期はそんなことを考えていた。

…はい。始めちやいました。ダイヤのA。

やってしまった感があります。

作者は中学時代はバスケをやっていたので野球とは縁遠く…。

ダイヤを見てから、野球の面白さにハマったので野球については猛勉強中です…。

追記

昔むかしに書き残していたこの小説を見つけてしまったので投稿しようと思った次第です。

続けられるかどうかは私の存在するはずもない文才次第です。

というか内容全部かえたんですけどね…
しかも文字数が足らなすぎ過ぎてあとがきの文章を本文にいれま
した。

文才のない筆者の程度が知れますね。

俺は新しい人生を手にしたらしい

「…き。…兄貴!!」

微睡みの中にいた俺はその声に覚醒した。

「…!!…はっ…はあっ。…は、晴翔?」

俺を起こしたのは弟の晴翔だった。

「もう、検温の時間か…?」

嫌な夢を見ていた気がする。はつきりと覚えていないが。

「は?ケンオン?部活だろ?まだ寝ぼけてんのか?」

弟は俺を訝しげに眺める。

「野球部、だっけお前?」

いつか流し聞きしていた会話でそんなことを言ってた気がする。

レギュラーがとれなかったとか、来年最後の夏だ、とか。

「なあに他人事みたいに言ってるんだよ。お前も赤木中野球部所属だろ?」

その瞬間俺の思考は一切の活動をやめた。

「…?」

アカギ中学…?俺は大学生でお前も高校だろ?というか俺もお前も鈴城中

出身だったはず…。

「さっさと部活いかねえとまた栄純に怒られるぞ?」

ビンタだぞービンタと言いながら、俺を蹴り飛ばしてベッドから落とす弟。

「!!足が動かないあ…」

兄に向かってその仕打ちはなんだ、と言いかけてとまった。

俺の足が動く。確かに膝を曲げた。動く。動いた。

「あ、るける、のか…おれは」

立ち上がる俺の足。他人事みたいにその様子を見る俺。

歩き方など疾うに忘れてしまったと思っていたが、人間案外忘れな
いものだな。

「また馬鹿なこと言ってるよ。」

呆れかえった弟の声をBGMに俺は泣きそうになっていた。

「ぶーかーっ！もう置いてからな!!」

何が何だかわからない。俺は今中学生で、4つ下だったはずの弟は同じ中学で

同じ野球部。俺は歩けるし、走れる。

意味が分からなさ過ぎて笑えてきた。

「いつてきまーす!!」

弟が家を飛び出していく声が聞こえる。

「日向夏ー?部活遅れるわよー?!」

1階から懐かしく呼ぶ母の声が聞こえる。

俺は独り部屋で泣いていた。

暫くして、時間の経過からか将又冷静さを取り戻したからか、

『今の俺の記憶』といったほうがいいのか、様々なことが頭の中で整理されていった。

弟が言っていた、赤城中学。

うちの中学のエース、沢村栄純。

そして、俺はあいつの女房役、所謂キャッチャーだ。

「4つ下の可愛い弟はいつの間やら、双子の弟になってるし…、俺は

一度もやったことない野球の捕手してるし…わけがわからんが…
もう一度自分の足で大地を踏みしめることにワクワクした。
もう一度俺は走れるんだ。そのことで頭がいっぱいになった。

「…部活行くか!!」

俺の記憶でも栄純のビンタは痛いからな。

もう、俺はこの人生を受け入れていた。

「あー、やっと来たよ兄貴。キャッチャーいないと練習捗らないだろー?」

ただでさえ、人数少ないんだから。」

晴翔がグローブをはめながらこちらによつて来る。

「栄純もアイツはまだかつてキレてたし…。」

「おっと、そいつは危険だな。じゃ、俺は旦那様のご機嫌でも取りにいつてくるわ。」

俺の口からそんな言葉がするりと出てくる。こんな軽口をたたくようなやつだったか?俺は。

「おーい。俺の旦那はどこですかー?」

目の前にいる、いかり肩をしている猫目になっているエース様に声をかける。

「日向夏!!お前はいつもいつも遅刻して!!そんなに俺の球が受けたくねーってのか!!」

栄純が大声をあげてこちらに迫ってくる。

「うるせーよ。おめーの球は捕りづれえっていつてんだろ?まともな球一球でも投げてみせろよ。」

俺がそういうと栄純は言葉を詰まらせる。

まあ、そこがこいつの持ち味だっということもよく知ってるんだけどな。今の俺は。

「高校行くまでにフォーシーム覚えさせたほうがいいのかねえ…」

今までの練習試合でもアイツのどこに行くのかわかんねえボールに

打者が対応できなかつた訳だが。打者が対応できないっことは、捕手も

捕球が難しいっということだ。こいつの場合は自分でもどこに行くかわかつて

ねえみたいだからな。っつーか、曲がってることすら知らねえんじゃねえ

のか。

「栄純。ちよつとこい。」

立ったまま俺とキャッチボールをしていた栄純を呼び寄せる。

「お前、ボールの握りはどうしてるんだ?縫い目にどうひっかけてる?」

「ヌイメ…?」

だめだこりゃ…

この一言に尽きる。

「お前…野球の勉強してこなかったのか?」

改めて聞いてこなかった俺も悪いけど…。

基礎くらいは…な?学んでると思うよな?!

「野球は実際にやるほうが楽しいだろ?!」

うん、馬鹿だな、とその時俺は痛感した。

「…わかった。お前が死ぬほど馬鹿なのはよくわかった。」

栄純がなにおう!?!とか文句を言っているが、事実だから仕方がない。

「とりあえず、真っ直ぐ球を投げようか?」

笑顔で超基礎講座の開講だ。

「まず、お前の球はみんなにとって捕りづらい球だ。

なぜだかわかるか?」

わかるわけではないな。そんな顔してる。

「それはお前がボールの縫い目も気にせずポンポン投げるから。」

「?縫い目気にして何になるんだ?」

野球の入門書を読めと言いたくなるのをぐっとこらえる。